研究区分	教員特別研究推進　教育推進

研　究 テーマ	胸部露出を伴う基礎看護技術演習に対する看護学生の評価				
研究組織	代　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	浅原　久恵
	研究分担者	所属・職名	看護学部・准教授	氏名	加藤　京里
		所属・職名	看護学部・講師	氏名	管原　清子
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	浅原　久恵

講演題目

胸部露出における羞恥心と基礎看護技術演習での演習方法の検討

研究の目的、成果及び今後の展望

【目的】

本研究の目的は、胸部露出を伴う基礎看護技術演習に対する看護学生からの評価を明らかにし、基礎看護学教育における演習方法や教授方法を検討することである。看護技術演習では、学生同士で看護師役と患者役となり実際の臨床場面を想定して技術を実践するため、演習内容によっては患者役の際に脱衣の必要がある。しかし、胸部の露出に対して抵抗感が強く拒否的な言動をする学生は近年増加傾向にある。基礎看護技術演習において、技術の習得状況や学習内容に関する研究は多いが、学生の脱衣に伴う羞恥や抵抗感に焦点をあてた研究はみられない。看護技術演習を効果的に行い学習目標に到達するためには、胸部露出に抵抗感を示し演習困難な学生が複数いるという現状を考慮し、体験によって得られる学習の成果と体験実施に伴う学生の心的負担を勘案して授業展開していくことが重要であり、演習方法や教授方法の検討に寄与できると考える。

【成果および今後の展望】

初年度は、医学中央雑誌 web 版を用いて文献検討を行った。胸部診察における脱衣の許容度の調査において、女性患者の脱衣に関する羞恥心が強く、年齢の若い患者ほど抵抗感が強いという結果が得られた（橋本ら 2001）。これは看護学生も同様であると推察できる。また、学生は男女共に、患者が日常的に遭遇する場面において胸部の診察を患者の羞恥が最も強いと判断していた（辻ら　2019）。坂口（1987）は、身体を触れられて恥ずかしいところの第１位は胸であり、女性を意識させる胸は、医師との場面ばかりではなく、同性の看護師との場面でも発育の成熟・未成熟の比較を感じるためか多くの羞恥心を抱く理由になっていると述べている。このような現状から、看護技術演習では学習目標到達に向け体験によって得られる学習の成果と、体験実施に伴う学生の心的負担を勘案して授業展開していくことが重要であると考える。近年、医療における実践的なトレーニング手法としてシミュレーション医療が注目を集めており、対象理解や看護実践能力の獲得、学習意欲の向上などの効果が期待されている。基礎看護技術演習において、実際に患者役を体験することにより、患者の立場で考え患者の感じる羞恥の理解を得られるという学びもあるが、羞恥心や抵抗感が強く演習での学びへの影響がある場合シミュレーターモデルの導入を検討していく必要もあると考えられる。

今後は、胸部露出を伴う基礎看護技術演習に対する看護学生の評価や意識を明らかにして、演習方法や教授方法を検討していく予定である。